# 第2節　チャンフー85（85TRAN PHU）

## 1　調査の概要

チャンフー85番はチャンフー通りの南側にある。古文書調査によって、この家から1811年以降の数多くの土地家屋台帳が見いだされている。現在では通りに面する前家のみが残っており（橋家があるがこれは古くはない）、建物は建築調査から現存する建物のなかでもっとも古い形式と思われる。後家（うしろや）は現存しないが、両隣の民家の壁面に残る痕跡から、かつてここに前家と同形式の後家が左右対称に配置されていたことがわかる。また後家入口部の敷石が若干残っている。この後家は対フランス戦争のときに破壊されてしまったという。

この後家の敷地に、1993年3月に試掘調査をいれ、石敷遺構を確認した。そのため、この遺構を明らかにする目的で、翌年の9月に第2次調査としてこの地区を発掘することにした。後家跡地区の南北11.5mの間に3カ所トレンチを設定し、北から順にA、B、Cトレンチと命名した。この結果、Aトレンチから3期にわたる建築遺構を検出した。出土した遺物から、これらの遺構は17世紀末、あるいは18世紀以降の建築遺構と思われる。また、B、Cトレンチからは現存する前家と対をなす後家の痕跡が確認された。

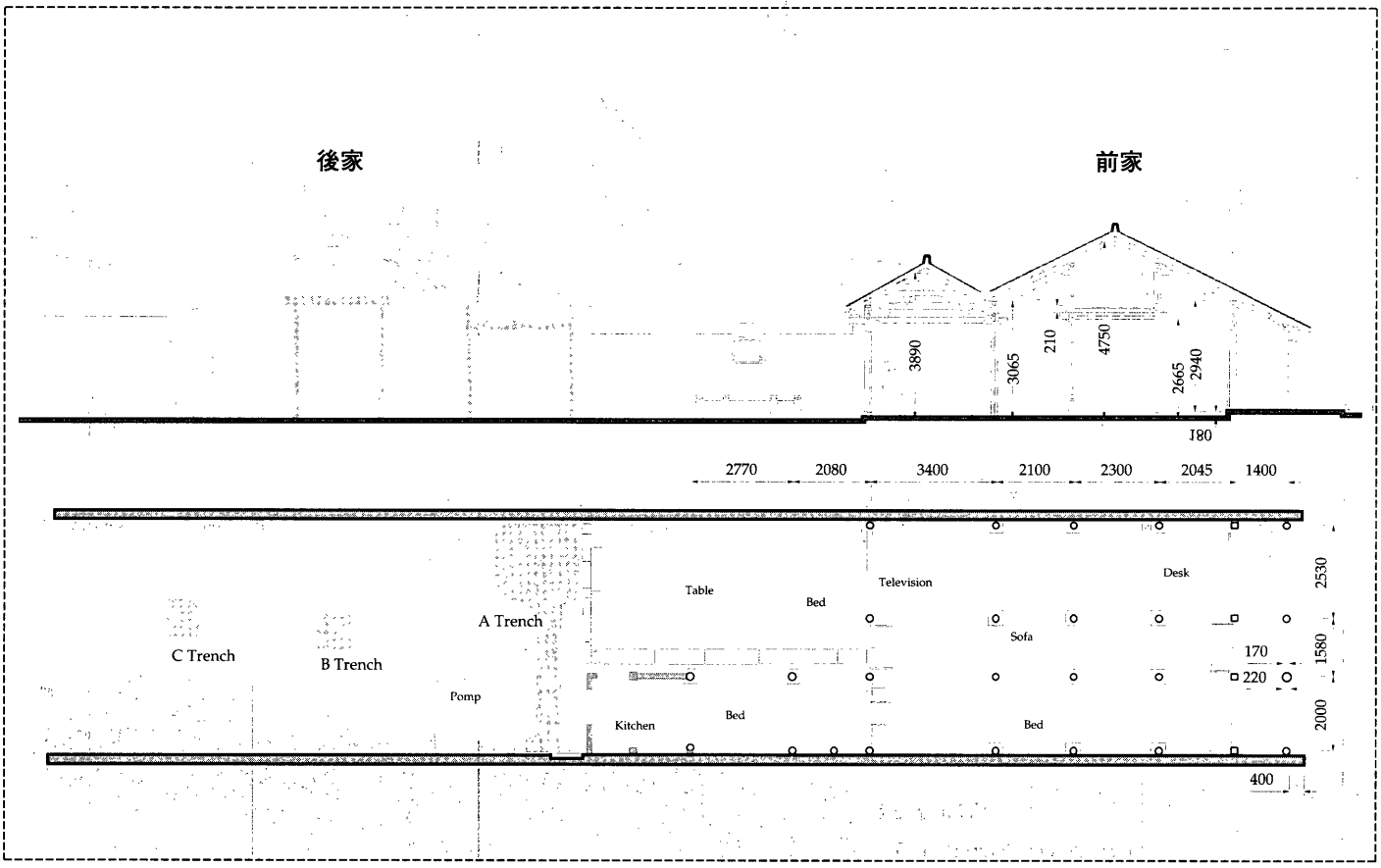
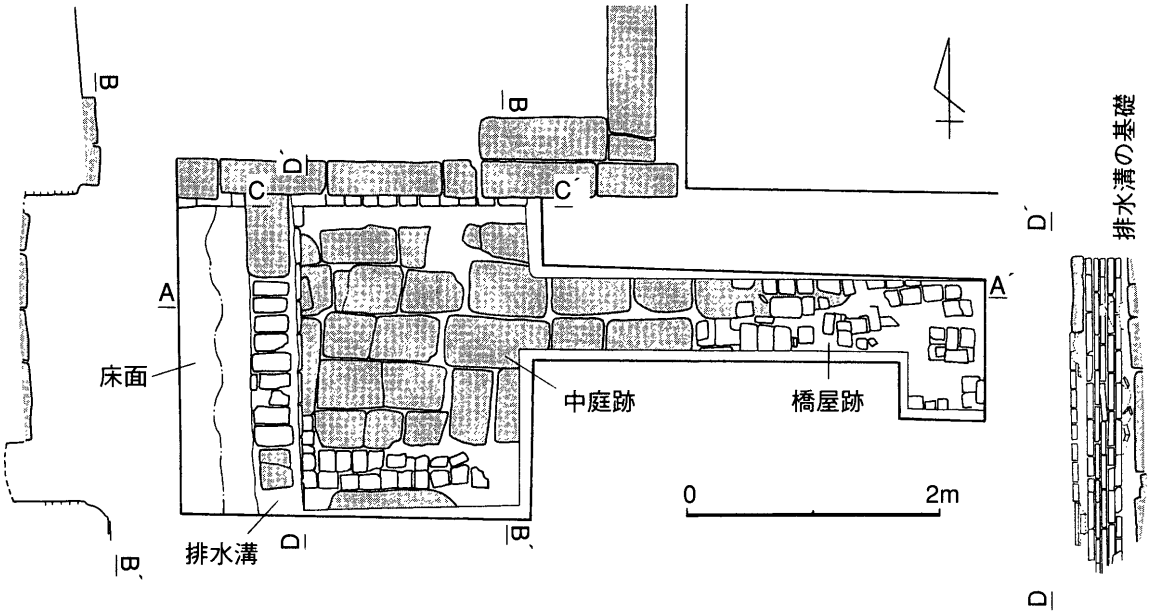
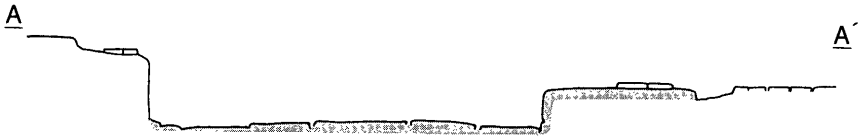
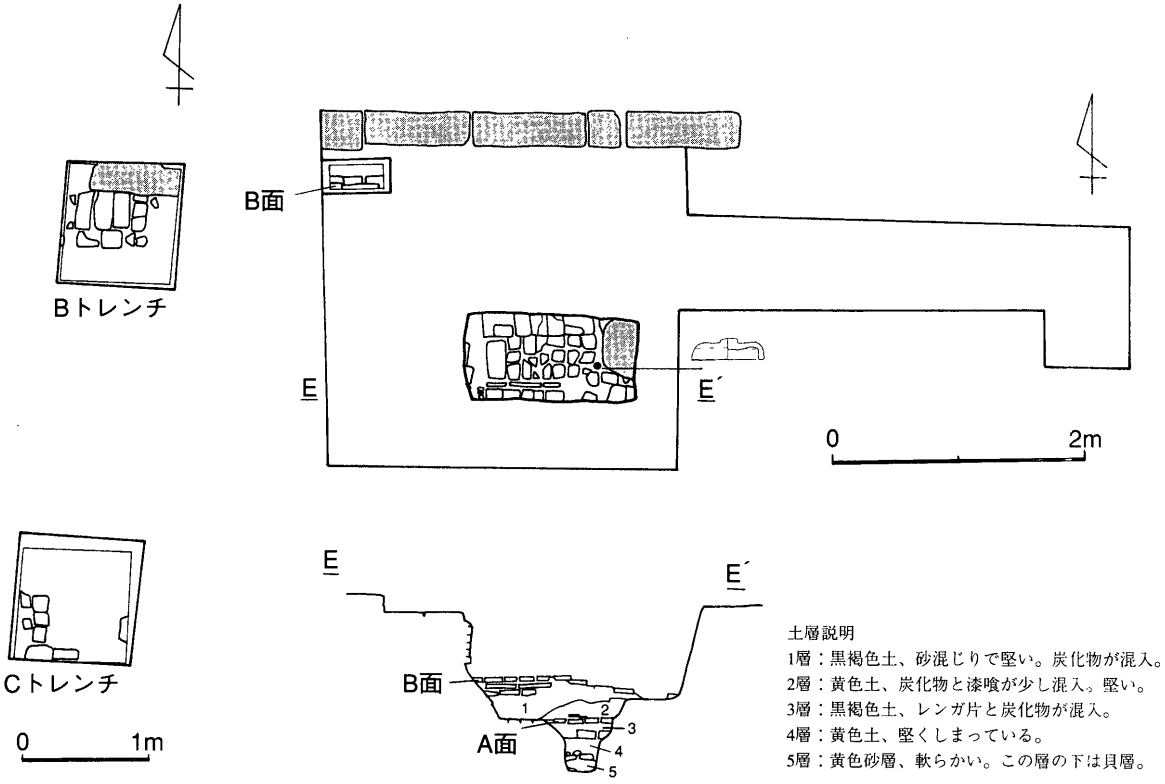



図14　トレンチ位置図




第2期の遺構




第1期の遺構

**図15　チャンフー85の遺構**

なお、発掘調査は1994年９月に実施し、発掘期間中、中京テレビによる撮影がおこなわれた。

## 2　調査日誌

９月９日　午後、ホイアンの事務所で打合わせ。

９月10日　発掘地点の写真撮影。トレンチの設定と発掘開始。Ａトレンチは２ｍ×2.5ｍ、Ｂトレンチ、Ｃトレンチはそれぞれ１ｍ×１ｍである。

９月11日　図面作成、午後、Ａトレンチで石敷を検出。

９月12日　休み。

９月13日　Ａトレンチを東側に拡張し、石敷より一段高くなった橋屋跡を検出。

９月14日　発掘地点の１／100図を作成。西側拡張部分の写真撮影。

９月15日　遺構平面図の作成。

９月16日　後屋跡の東西壁の基礎を確認するために、壁部分の掘り下げ。エレベーション図の作成。

９月17日　一部分石敷をはずし、調査。２層のレンガ敷を確認。レンガ敷をはずすと貝層があらわれる。写真撮影。遺物洗浄。

## 3　遺構（図15、写真図版４）

Ａトレンチ（拡張部も含む）は、現在の中庭の南側で、後家の西側壁に沿った2.5ｍ×2.7ｍのトレンチとそこから橋家沿いに東側壁までの幅0.7ｍのトレンチである。このトレンチから３時期にわたる建築遺構が検出された。上層より準じその概要をのべる。

**第３期**（上層の建築遺構）：現在の前家と対をなす後家の遺構である。床面、排水溝とその基礎、入口部の基礎部分を検出した。また、隣家との境をなす西壁と東壁の基礎を確認した。

後家の床面は撹乱のため大半がすでに破壊され、西壁に接するわずかな範囲（幅約30cm）で検出されたにすぎない。この床面は漆喰で作られ、厚さ約７cmの漆喰の下には、一部レンガを敷いている。排水溝は、幅が約40cmでレンガを２枚重ねて蓋とし、漆喰で固めている。また、部分的に石を蓋としている箇所もある。排水溝の基礎はレンガで作られ、このレンガは、長さが25～30cm、幅が約15cm、厚さが約５cmで、それを５段重ねている。排水溝の深さは約20cmで、排水を中庭に流すようにしている。

後家の入口部の基礎は、レンガを８～９段重ねて構築している。このレンガの大きさは、長さ約28cm、幅約13cm、厚さ約５cmである。この基礎の上に後家の入口部の石敷がのる。また、西壁と東壁の基礎を確認するため、トレンチの北西角の拡張部の東南角に深掘りをおこなったところ、西壁の基礎はレンガを２枚、東壁ではレンガを４枚重ねているだけであった。現存する壁の基礎がたいへん薄いことが判明した。

**第２期（中層の建築遺構）**：石敷の中庭跡とその面から１段高くなった橋家（前家と後家を連結する部分）と推定される建物の床面を検出した。この石敷遺構とレンガ敷遺構は同時期のものである。

石敷遺構は、第３期の後家の床面から約60cmほど低い位置で検出された。発掘区で24個の石が確認され、すべて表面が磨滅していた。石敷遺構は、トレンチの南側部分でなくなり、約15cm低い地点からレンガ敷を検出した。このレンガ敷は第１期の床面であることがその後判明した。石は大きさの違いがあり、大きいもので長径が40cm、短径が30cmほどである。厚さは５cmほどである。この石敷遺構は、現存するホイアンの町屋のなかで前家と後家の間に必ず設けられている中庭と考えられる。この石敷の下を確認したところ、石の下に砂を６cmほど入れており、砂の下にレンガ敷（第１期のＢ床面）が確認された。

また、この石敷遺構から東の拡張部で、遺構面から約30cm高くなったほぼ平ならなレンガ敷面を検出した。

これは、前家と後家を連結する橋屋と思われる。レンガの大きさは多様であり、また部分的に撹乱をうけているため、全面にレンガ敷を確認できなかった。しかし、当初は全面にレンガを敷いていたと思われる。このレンガ敷床面の２カ所にレンガで方形に作られ、床面から約10cm高くなったレンガ組がある。これは、橋屋の柱を据えた基礎と考えられる。このレンガ組は、長径で35cm、短径で26cmほどである。

出土遺物は石敷遺構の下から、中国磁器小片が25点、陶器・土器小片が15点、そして青銅製のランプ片が１点出土した。

**第１期（下層の建築遺構）**：第２期の石敷遺構の下を確認するため、部分的に石をはずし、1.4m×0.7mの規模で掘りすすめた。その結果、２面のレンガ敷（Ｂ面・Ａ面）を検出した。Ｂ面のレンガ敷は、トレンチの北西角の深掘り部分の深さ約60cm（後家床面から）でも検出されたので、Ｂ面のレンガ敷が面として広がっていることが確認できた。Ａ面のレンガ敷は、横に埋めたレンガと縦に埋めたレンガで作られている。完形のレンガは長径30cm、短径13cmほどであり、縦に埋められたレンガの厚さは４cmほどである。概して割れたレンガを埋めて平らにしている。さらに、このレンガを外し、掘りすすめたところ貝層があらわれたので、その下をボーリング棒で確認したところ何もなく砂層となり、発掘を終了した。

土層図に示したように、Ａ面の床の基礎として、最下層の貝層上にレンガ片と黄色砂層つめ、その上に15cmほどの上層で整地をおこなっている。そしてその上に平らにレンガを敷く。このレンガ敷の上にさらに20cmほどの土層があり、この土層の上にレンガが３段に平らに敷かれていた。おそらく、このレンガ敷は建物の床面と考えられ、そのため新旧２面の床が存在することになる。

出土遺物は、Ｂ面のレンガ敷を外した層（１・２層）から、中国磁器小片が13点、陶器片が７点、陶器蓋の完形品が１点出土した。みな小片であるため、磁器片２点と陶器蓋１点を図示した（図16－３・４・６）。また、貝層布近の最下層（４層）から中国磁器小片３点、陶器小片数点が出土した。そのうちの２点の磁器小片を図示した（図16－１・２）。

以上のように、このトレンチから３期にわたる家の改造と変化が認められた。つまり、下層の２面のレンガ敷は家屋内部の床の可能性があり、中層の石敷は前家と後家の間の中庭、また一段高くなったレンガ敷は橋屋の床面と考えられる。上層の遺構は現存する前家と対をなす後家の跡である。

各期の年代については、まず第１期の遺構がわずかに出土した中国陶磁器片から判断して、17世紀末あるいは18世紀以降であろう。出土中国磁器の生産年代は17世紀中頃から17世紀末、そして17世紀末から18世紀前半代のものであるが、これらの遺物は16世紀末から17世紀後半の遺物を出土するディン・カムフォー地点の溝跡や川跡からは確認されないため、ホイアンにおいては17世紀末以降の使用が考えられるからである。また、第３期の遺構は現存する前家と対をなす後家の跡であり、この家が保管している最古の土地家屋台帳は1811年である。そのため、第２期の遺構は1811年以前の18世紀代と考えられる。また、第１期の２面の床面に関しては、おそらく洪水からの被害を防ぐための床上げと考えられる。その理由は、1811年と1836年の土地家屋台帳によると、85番の家のすぐ後に川が流れており、おそらく18世紀代では家屋がより川に近接していたと思われるからである。ホイアン地域は雨季に川が氾濫し、洪水を引き起こしていたことは、1624年から２年間、ホイアンに滞在していた宣教師アレクサンドロ・ド・ロードの書物の中にも記録されている。すでに17世紀から洪水の記録がある。

Ｂ、Ｃトレンチは、それぞれ１ｍ×１ｍのトレンチであり、第３期に属する後家の床面と思われるレンガ敷を検出した。Ｂトレンチからは遺物が13点出土し、Ｃトレンチからは“明命通貨”銭と1964年銘のある旧南ベトナム政府発行の１ドン銭が出土した。

以上の調査結果から、チャンフー85番の地、つまりチャンフー通りに面する南側は、17世紀に存在してい

た“日本町”跡の上につくられた家ではないことになる。17世紀代はおそらくこの地は河岸か川そのものであったろう。

（菊池誠一）

## 4　遺物（図16、表１、写真図版19）

中国の福建・広東窯系の青花がほんとどの割合を占める。生産年代は17世紀中頃から18世紀前半までで、17世紀後半から18世紀前半のものが中心となる。報告するにあたって代表的な遺物を合計６点図化した。

１～５は福建・広東窯系の青花である。１は17世紀中頃から末の小碗である。口サビが施されている。

２～５は17世紀後半から18世紀前半の碗である。４は口サビが施されている。

６は中国産の陶器で、18世紀代の蓋であろう。外面には褐釉が施されている。口クロを用いて成形しており、内面中央部には指頭痕が残る。

（阿部百里子）

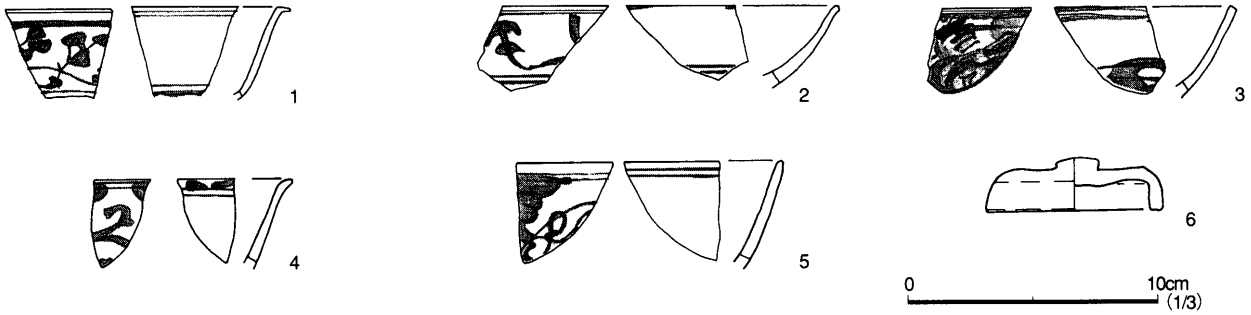



**図16　チャンフー85、出土陶磁器（Trung Quoc）**

| No. | 産地 | 器種 | 外側 | 見込み | 内側 | 高台内 | 年代 | 釉調 | 焼成 | 化粧 | 付着物 | a | b | c | d | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 001 | 福建・広東 | 染付小碗 | 唐草文 | | 圏線 | | 17c中頃～末 | 薄青 呉須やや暗 貫入有 | 良好 | □ | | | | | | 1/4 | 口サビ |
| 002 | 福建・広東 | 染付碗 | 文様有 | | 圏線 | | 17c後半～18c前半 | 呉須暗 | 良好 | □ | | | | | | 口縁部片 | |
| 003 | 福建・広東 | 染付碗 | 龍文 | | 文様有 | | 17c後半～18c前半 | 呉須やや暗 | 良好 | □ | | | | | | 口縁部片 | |
| 004 | 福建・広東 | 染付碗 | 唐草文 | | 口縁部文様帯有 | | 17c後半～18c前半 | 薄青　呉須暗 | 良好 | □ | | | | | | 破片 | 口サビ |
| 005 | 福建・広東 | 染付碗 | 文様有 | | 圏線 | | 17c後半～18c前半 | 薄青 呉須やや暗 貫入有 | 良好 | □ | | | | | | 破片 | |

| No. | 産地 | 種類 | 分類 | 文様 | 胎土色 | 色調内外 | 胎土 | 焼成 | a | b | c | d | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 006 | 中国 | 蓋 | | | | 外：褐釉　内：灰白 | 精緻 | 良好 | 1.8 | 2.1 | 6.9 | | 完形 | 18世紀頃の製品 |

**表１　遺物観察表**